

事業概要書

事業名	アートを通じた伝承手法の認知度向上と地域共創コミュニティ創成事業				
開始日	2026年4月21日	終了日	2027年4月20日	日数	365日
団体名	もやい展実行委員会				
(カウンターパート)	双葉屋旅館・市民測定室とどけ鳥・原子力災害考証館・ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館				
担当者名	相原 あや	スタッフ人数	7人		

事業費総額(税込)	3,513,900円
CF事業枠	3,500,000円
その他資金	13,900円

事業目的	アートの力により東日本大震災、そして原子力災害の記憶や教訓を伝承する。多様な立場の人が芸術活動を通じ協働し相互理解を深める場づくりにより、地域に根差した伝承館として運営体制を確立する。
事業全体の概要	●<u>もやい展実行委員会とは</u> 代表中筋純は、2007年、産業遺構撮影の一環として初めてチェルノブイリを訪れ、21年もの間時を止めたままの風景に衝撃を受ける。その後数度にわたり現地で撮り溜めた写真を、日本国内で発表する矢先に、福島原発事故が起きた。福島へ赴く活動を始めた中筋はその後、「流転～Fukushima&Chernobyl～」と題した写真展活動を展開。 この写真展活動の発展型として、東日本大震災および福島原発事故に関する複合アート展「もやい展」を着想。 アーティスト、支援者が協働し事業を成す任意団体として、2015年8月設立。 2016年2月より中筋純写真展「流転～Fukushima&Chernobyl～」全国巡回(約50か所) 2017年7月より震災伝承複合アート展「もやい展」開催。 2017年7月東京・練馬区立美術館・来場者1565名/5日間 2019年3月金沢21世紀美術館・来場者2494名/6日間 2021年4月江戸川区タワーホール船堀・来場者4230名/8日間 2022年8月若手アーティストと海外アーティストを招聘した「もやい.next」開催。 アートフォーラムあざみ野・来場者1500名/11日間 公共の展示施設を借り、設営、運営、撤収のすべてを市民ボランティアで行うスタイルを確立。資金は助成金、クラウドファンディング、現地カンパによって調達。 展示活動を続けていく中で、記憶の風化、次世代への継承の課題が浮き彫りとなり、より長期的な視点での活動が必要と認識する。 2023年、かねてから構想中であった「もやい展」常設展示館の設立事業を開始。福島県南相馬市小高区の皆さんの協力を経て、2023年7月12日に、3.11&福島原発事故伝承アートミュージアム「おれたちの伝承館」を開館。 アートによる震災伝承に特化した形で活動をしている。 ●<u>「おれたちの伝承館」について</u> ・2023年の開館以降の実績は以下のとおりである。

2023 年度 ワークショップ・イベント 12 件開催
 2024 年度 企画展 6 件 WS・イベント 10 件開催
 2024 年 3 月までの来館者 2600 名超
 2025 年 3 月までの来館者 5000 名超
 2025 年 7 月(開館より 2 年)来館者 6000 名
 2026 年 3 月までの来館者 8000 名到達

・入館無料の方針について

弊館は、東日本大震災および原発事故という未曾有の災害をテーマとし、芸術を通じた社会課題の可視化、記憶の継承と語らいの場の創出を目的として運営している。

被災経験の有無や年齢、経済状況に関わらず、誰もが自由に来館し、作品を通して災害の記憶や教訓に向き合う機会を広く提供するため、入館無料とする方針としている。

原発事故を含む本テーマは、今なお社会的課題として継続している問題であり、幅広い世代・立場の人々がアクセスできる開かれた場を設けることが重要であると考えている。入館無料とすることで、普段美術館や伝承施設に足を運ぶ機会の少ない方々や、若年層、被災当事者など、多様な来訪者の来館を促し、原発事故の記憶の風化防止と、原発事故伝承の社会的理解の深化に寄与することを目指している。

また、本事業は営利目的ではなく、原発事故という社会的テーマについて、誰もが自由に考え、語らう場を提供することを目的としているため、入館料収入に依存しない運営体制を目指している。収入は主に以下の 3 点からの構成である。

- ① 会場に設置するカンパ箱と銀行振込による来場者からの任意寄付
- ② 公的・民間助成金
- ③ マンスリーサポーター制度による継続的な寄付

いずれも任意性を尊重した支援であり、来場や鑑賞の機会を制限するものではないと考える。本事業の趣旨に共感いただいた方々と継続的な関係性を築くことを重視し運営している。

●取り組むべき課題

南相馬市や小高地区をとりまく課題には大きく以下の 2 つがあげられる。

①記憶の風化や伝承の断絶

南相馬市は、震災と原発事故による大きな被害を受けた地域であるにもかかわらず、公設の伝承施設もなく、伝承やアーカイブの取り組みも民間の小さな活動にとどまっており、記憶の風化や伝承が途絶える懸念がある。

地域内に若い世代が少ないため世代間の伝承が行えない現状がある。

②住民の流出と高齢化によるコミュニティの脆弱化

南相馬市小高区は、2017 年 7 月の避難指示解除までに 6 年を要した。2025 年 5 月現在、住民登録数は 6052 名と、震災前の 50%程度まで回復しているが、内 25%程度に当たる 1551 名は、市外に居住しており、特に子育て世帯の多くは環境汚染への懸念、教育環境や、医療や買い物などのインフラ整備の問題などから、避難先での暮らしを続け、帰還住民の構成は高齢世帯が多くを占めている (※)

震災後の急激な人口減少と高齢化により、地域の担い手や伝承の担い手不足が深刻で、交流の場が少なく、コミュニティの再構築にも深刻な課題を抱えている地域といえる。

※...参照：南相馬市被災者支援課／令和 7 年 5 月 31 日時点南相馬市の旧避難指示区域別の住民登録人口と居住人口

●地域内での継続的な伝承活動の課題

- ①前述の背景も相まって、すべての事柄で担い手不足であるが、南相馬市での唯一の

伝承施設であるおれたちの伝承館の運営においても同様である。また、担い手の受け入れや育成の環境が整っていない。

②心の復興や震災の記憶の継承が重要であるにもかかわらず、公的な支援の枠組みが整っていない。公金系の補助制度では「風評払拭」や「地域活性化」が求められ、伝承などの活動は対象外とされることが多い。

③予算の多くを民間助成金と自己財源で賄っているため、マンスリーサポーター制度など寄付基盤の整備など、安定した財源確保が必要となっている。

●おれたちの伝承館の抱える課題

伝承館の活動を地域に根付かせ、長期的に継続していくためには、来館者の増加や地域との関係構築に加え、担い手の育成と安定的な運営基盤の確立が不可欠である。

現在、南相馬市小高区では人口減少と高齢化が進み、地域活動の担い手不足が深刻な課題となっている。伝承活動においても同様であり、地域住民や若い世代が関わる機会を増やし、次世代へと活動を引き継いでいく仕組みづくりが求められている。

また、活動の継続性を高めるためには、助成金や寄付のみに依存しない多様な財源確保の仕組みを整えることも重要である。

●パートナー協働プログラム対象事業

○伝承館の機能の拡充によるコミュニティ活用と認知度の向上

・地域の方が気軽に出入りができるような環境づくりのため、醤油搾りや染物、音楽、ファッションなど、災害とは関係ないようなテーマでのワークショップの定期的な開催（年 4 回）し、伝承館との継続的な関係の構築につなげる。

・伝える場や、表現の場として、震災に関係するようなワークショップを年 4 回開催する

*参加費：1000 円～5000 円程度

*定員：音楽ライブ 30 名、制作ワークショップ各 25 名、上映会 40 名程度

・市の広報誌への掲載、行政区の回覧板でお知らせをする仕組み作り、紙媒体設置個所を増やす、Web ページ拡充、インスタグラム活用等、広報を強化する。

・隣接地倉庫内の環境を見直し、安心して過ごせる空間を整える体験型ワークショップを実施することで、伝承館への愛着を育み、自分たちの場所として継続的に関わってもらおうきっかけとする。

ワークショップにて整備を行う場所はキッチン、多機能フリースペースを予定。当面はフリースペースはアトリエや集会所、ギャラリー、上映会上など自主開催イベントでの利用を計画しているが、将来的には貸し出しも視野に入れている。

地域内における継続的な伝承活動の基盤として、「おれたちの伝承館」と地域の方との協働や、新たな担い手確保は欠かせない要素と考えている。

より多くの方が伝承館に訪れるきっかけとなるような多様なプログラムの企画と運営を行うことで、関心層の間口を広げ、活動参画への糸口としていきたい。

また、「原子力災害考証館 furusato」（いわき市）や、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」（檜葉町）、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）、震災遺構 請戸小学校（浪江町）など、これまで連携してきた近隣の伝承施設との連携をより一層強め、相乗効果での来館者増を目指す。

また、充実度については、来館者・参加者アンケートを通じて、満足度や理解の深まり、今後の行動意向等を把握することで評価を行う。これらの指標について、以下の方法により測定・分析を行い、得られた結果をもとに展示やイベントの企画改善およびホスピタリティの向上につなげていく。

測定方法

・開催記録（SNS 記事、報告書等）の確認

・参加者リストの集計

	・来館者・参加者アンケートの実施 アンケート内容 ・来館者が本事業や展示を通じてどのような価値や意義を感じたか ・今後どのような形で活動に関わりたい、または関わることを期待しているか ・震災・原発事故への理解が深まったか ・震災や地域の出来事について人と話してみたい、また人に来館を薦めたいか ・満足度および再来館意向 ●期待される効果 ・アートを入り口にすることで、従来の他の団体による伝承プログラムとは異なるアプローチが可能となり、これまで接点の少なかった「アートに関心のある層」への参加を促進できる。 ・訪れる方が増えることで、被災地 の実情を知り、地域に対する理解が進み、伝承につながる。 ・被災体験を伝えるために、表現する機会が増えることで、被災当事者自身の心の整理が促されるとともに、「自らも伝え手である」という自覚が育まれる。これにより、地域の担い手としての意識や役割意識の向上が期待される。 ・外部から訪れる方々との交流が生まれ、伝承館を軸にした新しいコミュニティができる。 ・集い、語らえる場所ができることで、地域交流の活性化ができる。 ●事業終了後の展開について ・安定した運営環境を整えることと交流の場を創出することで、関係人口の拡大を図り、その中から次世代の担い手を見出し、承継を見据えた体制づくりを進める。 ・デジタルツールの活用も積極的に進め、幅広い層(とくに若い世代)への訴求を強化していきたいと考えている。 ・その上で、アナログ的に現地で体感することの大切さ、交流の意義の深さを訴求し、アートによる伝承活動が、地域に根付き、ひろがり、ながく続いていくことを目指す。 ・財源確保の面では、マンスリーサポーター制度を導入し、単発寄付に依存しない安定的な運営を目指す。物販およびイベント事前決済にも活用することで、収益機会の拡大と支援層の裾野拡大を図る。また、来訪者向けのガイドツアーなどの体験型プログラムの開発や、伝承館の活動や理念を伝えるオリジナルグッズの制作・販売、オンラインストアの整備などを検討している。 これらの取り組みを通じて、アートを通じた伝承活動の自立的かつ持続的な展開を実現していく。 ●伝承館としての今後の展望 ・今後の活動の発展を見据え、被爆や公害などの記憶の継承に長年取り組んできた地域を訪問し、民間主体の伝承活動の運営方法や担い手育成の事例を学ぶ視察研修を実施する予定である。広島や水俣など、社会的記憶の継承において先進的な取り組みを行ってきた地域の施設や関係者から学び、地域住民や若い世代が関わる持続可能な伝承活動のあり方を模索していく。こうした学びは、伝承館の今後の運営体制の整備や、地域協働の仕組みづくりにも活かしていく予定である。
事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)

① 企画展 ・開催時期：2026 年 3 月～2027 年 3 月 ・場所：おれたちの伝承館 ・参加費：無料 ・対象：広く一般市民 ・プログラム内容：企画展：写真・絵画・造形・詩歌等の展示 ・集客方法：SNS・HP・メール・紙媒体による告知 ② ワークショップ ・開催時期：2026 年 5 月～11 月 ・場所：おれたちの伝承館 ・定員：15 名～20 名程度 ・参加費：1500 円～5000 円 ・対象：広く一般市民 ・プログラム内容：フィールドワーク付詩作ワークショップ・彫刻家による レリーフ制作ワークショップ・描画ワークショップ 集・客方法：SNS・HP・メール・紙媒体による告知 ③ イベント ・開催時期：2026 年 3 月～2027 年 3 月 ・場所：おれたちの伝承館、オンラインのハイブリッド開催 ・定員：各回 30 名程度 ・参加費：無料～2000 円 ・対象：広く一般市民 ・プログラム内容：アフリカンライブ・ギャラリートーク・蓄音機ライブ・ 映画上映・醤油作り・朗読劇 ・集客方法：SNS・HP・メール・紙媒体による告知 ④ 隣接地倉庫の DIY ワークショップ ・開催時期：2026 年 3 月～2027 年 3 月 ・場所：おれたちの伝承館 ・定員：各回 20 名程度 ・参加費：無料 ・対象：おれ伝サポーター ・プログラム内容：内部清掃・資材搬入・塗装・木工作業等 ・集客方法：SNS・HP・メール等による告知	【直接裨益者】 来館者 5000 名 【間接裨益者】 メディアでご覧になる 人 300 万人
---	--